
IDE 誌特集を深める会 第 1 回報告

IDE 大学協会 本部

日 時： 2007 年 11 月 10 日（土） 13：30～16：30
共 催： IDE 大学協会・桜美林大学
テーマ： 「大学ランキングの読み方」（2007 年 11 月号特集テーマ）
場 所： 新宿農協会館
参加者： 56 名
講演者： 小林 雅之 氏（東京大学大学総合教育研究センター教授）
 「大学ランキングと向き合う」
 小林 哲夫 氏（朝日新聞社「大学ランキング」編集部）
 「偏差値で上位にない大学に光を当てる」
 坂本 達哉 氏（慶応義塾大学常任理事・経済学部教授）
 「慶應義塾の国際戦略と大学ランキング」
 加藤 哲郎 氏（一橋大学研究担当役員補佐・社会科学研究科教授）
 「大学ランキングと一橋大学の取り組み」

IDE 大学協会・桜美林大学共催第 1 回 IDE 誌特集を深める会「大学ランキングの読み方」は、定員 70 名を超える申込者を得て、予定通り、11 月 10 日午後 1 時半から新宿農協会館会議室で開催された。IDE 大学協会運営委員、桜美林大学教授 館 昭氏の総合司会、IDE 誌編集長・IDE 大学協会理事・東京大学名誉教授天野郁夫氏の司会により会は進行し、特集に御寄稿いただいた小林哲夫氏、坂本達哉氏、加藤哲郎氏、小林雅之氏 4 氏から、順次、IDE 誌御寄稿の論説を基に、核心を衝く興味深いお話しをいただいた。

タイムズ紙の最新世界大学総合ランキングをめぐる

4 氏のお話に通じた意見は、「大学総合ランキング」の非合理性である。多くの専門分野にわたる教育、研究、社会貢献等大学の多様な活動を指標化、数値化、ウエイト付けして、その総計で大学を序列化する「大学総合ランキング」の信頼性に多くの問題があることについては、4 氏の意見は一致していた。小林雅之教授は、国内の大学総合ランキングが、既存の大学ヒエラルキーの追認的性格を持つことを指摘した上で、世界大学総合ランキングが、そのようなヒエラルキー感覚の乏しい世界の大学についても、グローバル化の進行により序列化の需要が高まってきたことが背景にあると説いた。

前日、2007年度のタイムズ高等教育版の世界トップ200大学が発表され、前年と比べて順位にかなりの変動があったことが、論議を深める好材料となった。

タイムズのランキングにおける順位の変動については、各氏が取り上げた。

東京大学は19位から17位、京都大学は29位から25位と比較的变化が少なかったが、大阪大学が70位から46位、東京工業大学が118位から90位、東北大学が168位から102位と大きく順位を上げたことなどが紹介された。

大学総合ランキングの問題点

小林雅之教授は、ピアレビューの得点がランキングの順位に大きく影響することを紹介したうえで、タイムズのピアレビューを委嘱された経験から、大学の知名度がピアレビューの判断の大きな要素となることを指摘した。その例証として、2007年度のタイムズのランキングで、順位が大きく動いたのは下位のほうで、上位に大きな変動がないことを挙げた。

小林哲夫氏は、論文引用度のデータベースが従来の米国のトムソン社のものから、オランダのエルゼヴィア社のスコープスに変更されたことが、順位の変動に影響を及ぼしたことを指摘した。

坂本教授は、タイムズのランキング決定方式の変化について、論文引用データベースの変更のほか、ピアレビューにおける自己帰属大学の排除、教職員の常勤数換算の厳密化等を挙げたのち、タイムズの大学ランキングについて、英語圏支配の強さ、理工分野の偏重、各国固有の文化、伝統、制度の軽視などの問題点を指摘し、既存の威信の強さを追認するようなランキングという発想自体に疑問を投げかけた。

加藤教授は、タイムズ、上海交通大学、ニューズウィーク等の世界大学ランキング

が、いずれも自然科学偏重のバイアスがあり、社会科学・人文学中心の小規模大学には初めから不利なシステムになっていることを指摘した。

大学総合ランキングへの対応

大学総合ランキングに多くの疑問点があることは、4氏が共通に指摘したところであるが、それへの対応については意見が分かれた。

総合大学ランキングへの不信を最も強く表明したのは、小林哲夫氏であり、朝日新聞社の「大学ランキング」の基本方針に即して、受験生のため、大学の多様な発展のためには、偏差値と異なる多様な尺度で大学を評価し、高偏差値でない大学が上位にくるようなランキングづくり、「東大が1位にならないようなランキングづくり」が重要であることを強調した。

小林雅之教授もまた多元的評価の重要性を説き、威信構造以外の評価基準や形成的評価の可能性探求の必要性を説いた。

一方、坂本教授は、世界大学総合ランキングが、学生の入学、留学先の選定、同僚研究

者の評価、大学の連携先の選定などにおいて、一定の機能を発揮する現実を指摘し、グローバル化の中での市場型大学評価として、世界の中での日本の大学の相対化、客観視や、自己評価指標としての有効性を評価した。そのような観点から、英語による発信の強化、外国籍教員の比率のアップなど、国際大学ランキングにおいて、日本の大学が適切な位置を占めるための努力の必要性を説いた。

加藤教授も、世界大学総合ランキングが、グローバルなアカデミック競争の今日的あり方を示しているとして、それが、留学生市場、研究者市場、競争的外部資金の流れに大きく影響するとして、日本の大学の積極的対応の必要性を説いた。特に一橋大学の取り組みについて、社会科学中心で規模、性格が類似している LSE (ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス) が、2006 年のタイムズのランキングで東大を上回る 17 位を占めたことに着目し、LSE について徹底的に研究したことを紹介した。LSE に学ぶべき点として、29 の学部、62 のセンターを持つフレキシブルな組織体制、博士号、修士号を持つ専門職事務スタッフによる支援体制の充実、1 年修士コース中心に留学生比率 6 割という留学生の多さ、リサーチ・センター/グループによるたえざる最先端領域への挑戦、共同研究の組替えを挙げた。

質疑応答と参加者の評価

4 氏の発表後、参加者との質疑応答、意見交換に入り、参加者から、学生・両親の視点に立ったランキング策定の必要性、日本主導の世界大学ランキング構築の可能性、大学ランキングへの疑問点など活発な発言が相次ぎ、活気ある展開の中で閉会となった。

閉会後の参加者のアンケート調査 (回収率 66%) では、「期待以上 62.2%」「期待どおり 37.8%」「大変満足 70%」「まあ満足 30%」と高い評価を得ることができた。

素晴らしい発表をいただいた 4 人の先生と、ご参加いただいた皆様に深く感謝申し上げたい。ご好評に力を得て、引き続き第二回を企画しており、一層のご支援をお願い申し上げる次第である。

大崎 仁 (IDE 大学協会副会長)